

「思想」としての歌 谷岡亜紀

今や昔話のように語らなくてはいけないのが悲しいが、「前衛短歌」に端を発した「現代短歌運動」においては、作品や歌集を評価する軸として、「方法」と「思想」が明確に意識されていた。そんなに昔の話ではない。「思想」というと大仰に響くが、英語では *thought*。何のことはない自分の頭で「考える」ことである。

その考えが人間や時代社会の何か核心に触れる時、それは「思想」と呼ばれる。簡単に言えば人間への問いであり、人生への問いである。例えば竹山広の歌も佐佐木幸綱の歌も伊藤一彦の歌も、「思想」と呼ばれるその軸を外して真に理解することはできない。

三枝浩樹『時禱集』は、あらためてそのようなことを思い出させてくれる歌集だった。内省的な思考、思惟、思索によってなされた、静かな哀しみと祈りを湛えた一冊である。

ただ一度生まれ果つる時のなかひとりにひとりの終の答あり
 ・ものの持つ感覚にめざめゆく予感のごとき今朝の青空
 ・いましばしこの世の時のなかにあるわが妻わが子 春暁の空

『時禱集』とはリルケの『時禱詩集』に触発されたタイトルだという。リルケといえば『マルテの手記』を思い出すが、内向する「随想」の手触りはこの歌集にも顕著である。

一首目は、人生への問い、いかに生きるかへの問いが、直接表白された歌。大いなる問いがあり、そして答えがある。あるいは答えはどこにもないかもしれないが、その「終の答」を探すこと

がすなわち生きることであると作者は考える。作者にとつて歌とは、その答えに至る道筋なのだろう。二首目では、世界の存在を感得してインスパイアされる魂がうたわれる。「感覚」に敬虔な知の手触りがある。三首目では歌集のタイトルともなった「時間への祈り」が歌われる。この歌集全体に通底するのは、時間に支配され、死を運命づけられている人間存在への、根源的なかなしみである。人間とはすなわち、例外なく「悲の器」なのだという思いが、その根底にはあるだろう。

・かぎりなき贈与のなかにめざめつつひかりの春の木に凭りいた
 り

・広やかなあおぞら ゆるすということを否、ゆるされていること
 と知らず

神の存在にまつわる思いが示された歌である。宗教もまた、生きる理由や方向性を求めて帰依するものであり、その意味で究極の「思想」であると言える。著者は後書きで「歌は鎮魂であり、祈りでなければならぬ、とそう考えた時期が長かった」「この基調音が、やがてわたしを聖書に導いていった」と述べる。

こうした三枝浩樹の歌を読みつつ思い出すことがある。私が二十六歳の時に半年弱旅をしたインドでのことである。ゆく先々で日本人ほどの宗教を信じるのかと尋ねられた。ヒンドゥー教徒が大半を占めるインド人にとって、それは最大の関心事であるらしかった。私は、多くの日本人は厳密な意味では無宗教に近いと答えた。ではどのように生きる指針を決めているのかと、彼らはみな信じられないという顔をした。宗教に依ると依らずにかかわらず、「生きる指針」は誰にでも必ず必要である。その意味で「思想」とは決して遠い別世界のものではない。